

中学校の英語科授業における「主体的・対話的で深い学び」

— FonF とスキット作りの活用 —

教科高度化分野 (17220913) 齋 藤 昌 広

新学習指導要領 (文部科学省, 2017) に, 「どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら, 教育活動の充実を図るものとする」とある。また英語では「単元など内容や時間のまとまりを見通して, その中で育む資質・能力の育成に向けて, 生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」とある。資質・能力の育成のためには「主体的・対話的で深い学び」が必要である。本研究では, FonF の原理とスキット作りの手法を通して, 「主体的・対話的で深い学び」につなげる方法を考察する。

[キーワード] 言語活動, FonF, スキット作り, 深い学び

1 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在と研究の背景

「英語の苦手意識を無くさせる授業, 一つの文法事項を何度も繰り返して, 暗記をして, その授業で覚える授業, 新しいことでなくて良いから, そのような指導法を身につけてくるように」と勤務校からは言われてきた。定期テスト直前に, 何度も繰り返し練習させることで, 得点アップにはつながった生徒もいたが, 英語学習に対する意欲にはつながらない生徒もいた。そこで, 生徒に学習意欲を持たせるために, チャンツを使った文法の導入や文法事項の定着のために毎時間, 1 文程度の英作文をさせていた。

単なる繰り返して英語は身につくのであろうか。和泉(2009)によると, これまでの SLA 研究 (第二言語習得研究) で得られた重要な知見の 1 つとして, 言語習得は単なる断片的知識の積み重ねや, 機械的な反復練習で起こることではないことが挙げられると述べている。学習者は, 母語の知識や動機付け, 学習意欲, コミュニケーションの必要性や心理言語的な学習制約要因など, 様々な内的要因によって強い影響を受ける。それらに, インストラクションやインプットなどの環境的要因が複雑に絡み合っていて起きていくのが, 高度に認知的な第二言語習得の過程であると考えられる。

新学習指導要領では, 「知識・技能」という形で根底となる力を再認識し, 「確かな学力 (思考力・判断力・表現力等)」として実生活で応用していくことが求められている。その力をつけるために,

今, 授業の見直しが迫られている。

(2) 研究の目的

本研究の目的は, 従来の文法指導中心のシラバスではなく, コンテンツから入る FonF (フォーカス・オン・フォーム) の原理とスキット作りの手法を用いることで, 題材をどのように工夫すれば「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング) につなげられるかを探る。

(3) 研究の方法

教職専門実習Ⅰでは中学1年生を対象に「リサイクル」の授業を行った。また, 教職専門実習Ⅱでは, 中学2年生を対象に「道案内」の授業を行った。それぞれの授業を通して, 生徒が関心を持っている事柄や生徒の様子を観察・記録し, 生徒の自己評価の記述をもとに学びの深まりについて分析, 考察する。

2 先行研究より

(1) FonF (フォーカス・オン・フォーム)

和泉 (2009) によれば, FonF (フォーカス・オン・フォーム Focus on Form - FonF) は, 「言語形式の焦点化」とも呼ばれている。形式重視の教授法 (Focus on Forms) と, 意味重視の教授法 (Focus on Meaning) とも区別され, 単に両者を足して2で割ったようなアプローチでもない。2つの教授法の利点と問題点を考慮した上で, 両者のバランスを質的に達成しようとする試みが, FonF である。意味に焦点を当てた授業の中で, 生徒が遭遇する発話や内容理解の問題に対して, 彼

らの注意を言語形式に向けさせる試みである。FonF は、最新の SLA 研究の知見に基づいた言語教育アプローチであり、第二言語習得の複雑性を考慮した上で、効率的且つ効果的な言語教育を進めようとするものである。FonF が重要視するのが、意味ある理解可能なインプットであり、アウトプット、インタラクションである。

SLA 研究では、学習者同士の対話の中での「気づき」に注目している。学習者が気づかなければならないのは、単なる言語形式ではなく、それが何を意味していて、どういう場面で使われているかということである。そのような「気づき」を支援する手段として FonF がある。その意味で、FonF は、学習者が本来持つ能力を最大限に活かしつつ、「気づき」という働きを通してその学習者を支援し、効果的な言語習得に導いていこうとしている。

FonF は「自然力を養育するアプローチ」として捉えることができる。伝統的教授法のように「最初からきちんと押さえていく」のではなく、「最終的に身につけていく」(Get it right in the end)との姿勢で捉えている。FonF で使われるシラバスのタイプは、意味内容のある言語使用のコンテキストを大切にするため、意味重視の教授法と同様に、トピックス／テーマ・シラバスやタスク・シラバスを基調とする。また、その言語習得観は、意味重視の教授法と同様、分析的教授法の立場をとる。学習者のコミュニケーション・ニーズや心理言語レディネスといった内的シラバスを重んずることから、FonF は学習者主体の教授法と言える。

(2) スキット作り

野平・大澤・大窪・添田(2010)は、川崎市立の中学校教諭によって構成された外国語教育研究会のメンバーとして、英語科授業における「コミュニケーションを支える文法指導の研究」を行っている。FonF の原理を取り入れた授業展開とスキット作りの言語活動を実践に取り入れている。

そこで彼らは複数回にわたって、スキット作りを取り入れた実践授業を行っている。まず最初の授業(中学1年生対象)では、名詞の単数形と複数形をターゲットにしたスキット作りを行っている。その実践の中で見られたスキット作りのメリットとしては、生徒の興味を引きつける工夫があったので、複数形や“*How many ...?*”に、すぐに気づくことができたということである。しかしながら、同時に、説明がなくても文法事項を理解

できていたので、文法事項の確認を行うことが逆に授業の流れを遮っていたことや、インタラクションや練習が単調で、話題の広がりには欠けていたこと、練習が不十分だったので、スキット練習では自信をもって活動することができなかったことなどの課題も明らかになった。そこで、それらの課題の解決を目指し、さらに検証授業を実施した。その際、前回の実践を踏まえて、後のスキットで使えるように、例文は対話形式で提示することや、モデル文をオリジナル化することによってどんな状況でその形式を使うのか、という理解を深めること、何度もスキットを練習できるように、3パターンのペアの組み方を使うなどの改善を行った。モデルスキットを見ながら、発表する生徒が多かったことや、進行形の形式に慣れる練習が不足していたこと、全体がどれくらい理解できているかを確認するために、個人への指名をもう少し行っただけのほうがよかったことなど、さらなる課題も明らかになった。

野平、他(2010)の研究の実践では、「文法知識を理解させてから使わせる」のではなく、「使わせながら文法知識を学ばせる」ということを意識して授業を行っている。彼らは、使う場があるからこそ学ぶ必然が生まれ、その結果、生徒が自ら学ぼうとすると考えた。そのため、生徒が「知りたい」「伝えたい」という気持ちになるような豊かな内容で、目標となる文法を使う必要がある場面を設定した。文法指導にインタラクションを用いることにより、「ことばを使う機会」「豊かな内容」「適切な場面設定」という3つの条件を満たす手立てを行っている。

この授業実践から、わかりやすい場面設定や内容を与えると、多くの説明を与えなくても生徒はその文法の意味や使い方に気づくことがわかった。また、その「気づき」だけにとどまらず、授業観察から、ことばを使いながら目標とする文法知識を身につけ、伝えたいことを表現しようとする生徒の様子がうかがえる。これらのことから、野平、他(2010)は、この研究で取り組んできた手立てには、一定の効果があつたと述べている。しかし、彼らの実践には、新学習指導要領(文部科学省、2017)で求められる「主体的・対話的で深い学び」の要素が含まれていない。より実践的な対話の質が求められている。そこで本実践では、生徒がより主体的に、より対話的になるよう実践を行った。

3 実践

6月と11月に、山形市内の中学校で、それぞれ3週間ずつ教職専門実習を行った。そこでは前項の理論を受け、生徒が「主体的・対話的で深い学び」につながるような授業構成の工夫を行った。その工夫と成果については、以下の通りである。(1) FonF の手法を活用した単元の導入の工夫(教職専門実習Ⅰ)

教職専門実習Ⅰでは、A 中学校の1学年の授業を担当した。学習する文法事項は「How many ～ ?」である。生徒がリサイクルについて身近な問題として捉えられるような学習活動を目指して、以下のような活動を行った。

課題：リサイクル活動について考えよう

- ①リサイクルについてグループで考えさせる。
- ②教師が出したクイズをもとに、日本のリサイクルとアメリカ(サンフランシスコ)のリサイクルの取り組みについてグループや全体の話し合いで比較する。
- ③教科書を読んで、登場人物たちのリサイクル活動について理解する。
- ④教科書のアクティビティを通して How many の使い方とその答え方を理解して使ってみる。

アメリカ(サンフランシスコ)と日本(山形)のゴミの出し方の違いについてクイズにすることで、生徒の多くが積極的にクイズに答え、外国と日本の生活文化の違いについて関心を持つ様子が見えた。さらに、アメリカ(サンフランシスコ)と日本(山形)のゴミの出し方の違いについてグループで話し合う活動を行った。発表の様子や感想を見ると、生徒たちは、外国と日本の違いに気づくとともに、ゴミの問題やリサイクルについてを身近なものに捉えた上で、文法練習などの活動に移ることができていたとわかった。FonF の「意味に焦点を当てた授業の中で、生徒が遭遇する発話や内容理解の問題に対して、彼らの注意を言語形式に向けさせること」の有効性が確認された。

(2) スキット作りを活用した学び合いの設定(教職専門実習Ⅱ)

教職専門実習Ⅱでは、B 中学校の2学年の授業を担当した。学習する文法事項は「Which bus goes to ～ ?」である。生徒が英語での道案内について身近なこととして捉えられるような学習活動を目指して、以下のような活動を行った。

課題：外国からの旅行者に山形の観光地の行き方を案内できるようにしよう

1 時間目

- ① JTE と ALT の会話を聞いたり、教師の質問に答えたりする事で、行き方を尋ねたり答えたりする言い方を理解する。
- ② Google Maps (英語版) で行き方を調べる。
- ③ 調べた情報から、グループでスキットを作る。

2 時間目

- ① 前時に作成したスキットの練習をする。
- ② 前時に作成した道案内のスキットを発表する。
- ③ 旅行者役と中学生役に分かれ、カードを使った道案内の対話をする。
- ④ 指名された数ペアが、ALT に道案内をする。

実際にコンピューターを使って Google Maps (英語版) を使用して道順を調べることで、課題が「自分ごと」になり、主体的に取り組んでいる様子が見られた。

生徒たちが自ら調べたことをもとに、グループで協力してスキット作りをすることで、英語が苦手な生徒でも、得意な生徒でも取り組みやすい活動になった。

ペアで行き先が書いてあるカードを使って対話を繰り返すことで、グループで作ったスキットに主体的に取り組む活動となった。また、カードを使ったゲーム的な感覚だけでなく、ジャンプの課題を設けることで、教え合いなど対話的な学びにつながった。指名されたペアが ALT と会話する活動では、実際のやり取りの場面をイメージした活動をすることができた。また、ALT が行き先の質問の仕方を少し変えて行うことで、さらに実際の場面のイメージを膨らませることができただけでなく、ペアで協力して、会話を続けることができ、深い学びにつながっていた。

4 考察

(1) 「気づき」の観点から

教職専門実習Ⅱの授業では「東京オリンピックが間近になり、日本に興味を持った観光客が行き先について中学生に尋ねる」という場面設定を行い、実在する場所を使ったスキットを作り、それを元に対話をさせた。導入として、文法事項の細かな説明は行わず、JTE と ALT がモデルの対話を行った。そのため、単なる言語形式ではなく、どのような場面で使われているかということを生徒

たちは容易に理解することができていた。

(2) 主体性の観点から

教職専門実習Ⅰでは、授業の導入でクイズを取り入れたり、教科書で取り扱われる内容についてグループで話し合いをさせたりした。学習内容を身近な問題として内容理解につなげることが重要であると考えた。教職専門実習Ⅱの授業では、実在する場面や場所を使ったスキットを作り、それを元に対話を行うことで、より身近な話題として考えさせた。生徒に生の情報を与えることで、主体的に取り組める課題となった。また、インターネットなどで調べ学習を取り入れたり、さらに ICT 機器を活用したりすることで、英語が苦手な生徒の活躍の場、そして学びにつながる生徒同士の対話が生まれるタスクとなった。そのことにより、英語を苦手とする生徒が得意な生徒に頼りすぎなくなる。さらに、生徒が互いに多様な意見を取り入れることにつながる。「ジャンプの課題」を設けたことも有効であった。まとめの活動として ALT と生徒の対話を行った。ALT が対話する際に、モデルの対話では使われていない言い方を使うことで、生徒たちは知っている表現を使って即興で答えようとして、より主体的に取り組むことができた。単元で扱われる内容や言語表現を、生徒にとって身近な表現として捉えるために、教科書の題材をアレンジして、生徒が「自分ごと」にできるような工夫をすることが必要である。この事が「深い学び」につながるものと考えた。

5 到達点と課題

(1) 到達点

本研究の到達点として3点あげる。1点目に、意味重視の言語使用のなかで、文法などの形式に意識を向けさせる指導が重要であるということが明らかになった。このことは、インタラクションや練習が単調で、話題の広がりにつけてしまうことを防ぎ、生徒の表現を広げることが期待される。

2点目は、扱う題材を生活により近づけることで、「自分ごと」になり、「主体的な学び」につながるということである。このことは、生徒が自ら表現を引き出そうとしたり、使おうとしたりする意識が働き、表現を「覚える」という意識はなく、授業が単調にならなくなることが期待される。

3点目は、グループで相談して自作のスキットを作ることで、教え合いから自然に対話生まれ、

深い学びにつながっていた。このことは、以下のような教職専門実習Ⅱの授業を受けた生徒たちの感想からもわかる:「やっていくうちに聞き方や応え方がしみてきた。」「難しい所がたくさんあったけど、何回も挑戦することができた。」「日常でこんなことがあれば、どんどん活用していきたいです。」「実際にありそうなシチュエーションだったので楽しかったです。」「日本に観光に来る外国人が多くなる中、私たち中学生が英語で会話できるようになることによって外国人を助け、さらに日本の良さを伝えられるようになりたいです。」

(2) 課題

アンケートや授業観察から、主体性を喚起できるシラバス作りができ、学習者のコミュニケーション・ニーズに答えることができたと考えられる。ただし、評価をどのようにしていくかについての課題が残っている。さらに、インタラクションをどのようにしていくかということや、英語の授業における日本語と英語の使用のバランス、スキット作りがモデルの文を作ることで終わらせないことなどの課題がある。まとめの活動としてほかのグループのスキットを見て、さらなる「気づき」につなげていけるのではないかとことや、英語でのインタラクションになった時に「気づき」が深まるのではないかとことや、さらなる検証が必要である。

引用文献

和泉伸一 (2009) 「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育, 大修館書店。

文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領」, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afileldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf (最終閲覧 2018 年 1 月 16 日)

野平夕子・大澤有史・大窪洋次郎・添田紗織 (2010) 「コミュニケーションを支える文法指導の研究 ―豊かな言語活動をめざした導入と練習の考察―」, 『川崎市総合教育センター研究紀要』第 24 号, pp. 85 - 104.

Proactive, Interactive, and Deep Learning in Junior High School English Classes with FonF and Skit Making
Masahiro SAITO